

採用された教材から見た中学校美術科の一側面について

On the Teaching Materials Implemented in Junior High Schools

筑波大学大学院 直江俊雄

I はじめに

この論文は、一定地域の全美術科教諭より調査したり、各校で生徒に合わせて実際に行なった教材配列を、「実施されたカリキュラム」として考察していく研究の一つの経過を報告するものである。この研究に関する発表としてはすでに以下のものを行なっている。

- ①「中学校美術科における「実施されたカリキュラム」研究—その目的と概要—」、『藝術教育』第4号、筑波大学芸術学系芸術教育学研究室、pp. 115～132, 1992
- ②「中学校美術科における「実施されたカリキュラム」に関する考察(1)」(第30回大学美術教育学会, 1991)
- ③「採用された教材から見た中学校美術科の一側面について」(第14回美術科教育学会, 1992)

この研究の目的に関しては、①に述べている。②では、結果を分野別に概観した傾向について発表し、③では、分野間の関係や個別の教材の採用傾向について発表した。この論文では、②の傾向を踏まえて、③で提示した現象に関して、その後の成果を交えてさらに考察を加えていきたい。なお、この論文では分野間の比較をもとにした考察に重点を置くため、③で提示していた、採用された個別の教材の評価の方法に関するマトリックスについては収録しなかった。

II 調査結果に見られる現象

1 概況—〈絵画・彫刻・鑑賞〉から〈デザイン・工芸〉への傾斜

「実施されたカリキュラム」の特性を示す一つのスケールとして、「分野別時数構成比」を設定してみた。これは一つ一つの「実施されたカリキュラム」について、年間に実施した授業時数に対する各分野の教材の実施時数の比を算出したものである²⁾³⁾。その全体的な傾向がどのような特徴を示しているかを見るために、第1・2学年における平均を、昭和44年度版学習指導要領で示されていた時数配分の目安と比較してみたものが図1⁴⁾である。これに見られるように、今回の調査で明らかになった「実施されたカリキュラム」では、〈絵画〉〈彫刻〉〈鑑賞〉の分野よりも、〈デザイン〉〈工芸〉の分野に多く時数をかけて実施しているという傾向が読み取れる。また、分野別に時数比の分布を調べてみると、〈絵画〉〈デザイン〉〈工芸〉の分野ではほぼ平均の値を頂点とした一般的な分布をしているが、〈彫刻〉と〈鑑賞〉の分野では、年間実施時数が0の場合

がそれぞれ回答者の半数を上回り、最も多くなっているという点が特徴的である。この点が、図1のような現象につながっていると考えられるが、なぜ、教師たちはこのような選択の傾向を見せたのであろうか。以下に分野別に見られる現象をもう少し整理してみたい。

2 <絵画>教材に見られる教師の理念と現実との差異

<絵画>の教材の実施状況は、時数で見ると安定しているように思われる。分布状況も年間実施時数の2～3割をピークとしてなだらかな曲線を描き、実施時数0の割合は、他分野と比較して最も低い。しかし、これを教師・生徒の教材に対する意識との関連で見ると、複雑な様相が明らかになってくる。図2は、教師が意欲を持っているとして挙げた教材と、困難を感じているとして挙げた教材を、分野別に分けて回答者数に対する割合を示したものである。比較してみると、分野別時数構成比の傾斜と対応するように、<絵画><彫刻><鑑賞>における「意欲」に対する「困難」の優位、<デザイン><工芸>におけるその正反対の状況が現われている。<絵画>に関してみれば、わずかに「困難」とする割合が多いが、実際には「意欲」と「困難」がともにほぼ3割という高い値で拮抗しており、このような特徴は他の分野では見られない。さらに詳しく調べてみると、「困難」を表明した教師のなかにも、全体と同じくらいの割合で同時に「意欲」を現している教師がおり（他分野ではいずれも「意欲」と答えた割合は低下している）、「困難」さが教師の意欲を減退させていないことが読み取れる。一方、教師から見た、「生徒が関心を示した／示さなかった」教材の割合を比較してみると（図3）、半数に近い教師が生徒が関心を示さなかった教材として<絵画>に関するものを挙げており、他分野と比べてその関心の低さは際立っている。

このように、<絵画>教材における教師と生徒の意識に現われた差と、「実施されたカリキュラム」との関係はどのように理解したらよいただろうか。図1で<絵画>に「意欲」を表明している教師の挙げている理由を見ると、「美術の基礎だから」「観察力をつけさせたいから」「生徒に必要だと思うから」というような観点が目立つ。これに対して「困難」を表明した理由としては、生徒の態度・関心・能力などの問題を挙げる例が多い。つまり、生徒の側の<絵画>に対する圧倒的な関心の低さという現象を前にして、その指導に多くの教師が困難を感じながらも、<絵画>は美術教育の基本であり中心的な活動であるという強固な信念が教師の意欲の一つの源泉となっており、それが「実施されたカリキュラム」に現われた、表面上は最も安定した実施状況を支えているものと考えられる。もとより、青少年期における描画活動への意欲の減退は指摘されてきたことであるが、それをなんとか改善して多くの生徒が絵画表現に意欲的に取り組めるようにすることが教師の一つの使命である、と考えられている面もあると思われる。しかし現在においてもなお、このような現状を改善する方策がないとしたら、心理的に拒否感を示している多くの生徒に対して、払われている教師の努力と実施時間は、かなり大きな負担を強いるものとなっているのではないだろうか。並はずれた力量と努力を持った教師のみが成功できる教材ではなく、ごく普通の良心的な教師が、日常的な活動のなかである程度の達成感を成就していける教材であるかどうかという点も、教材としての有効性の重要な要素であると考えられるからである。

また、<絵画>教材と<デザイン><工芸>の教材の間には、教師の側の解釈上の融通性ともい

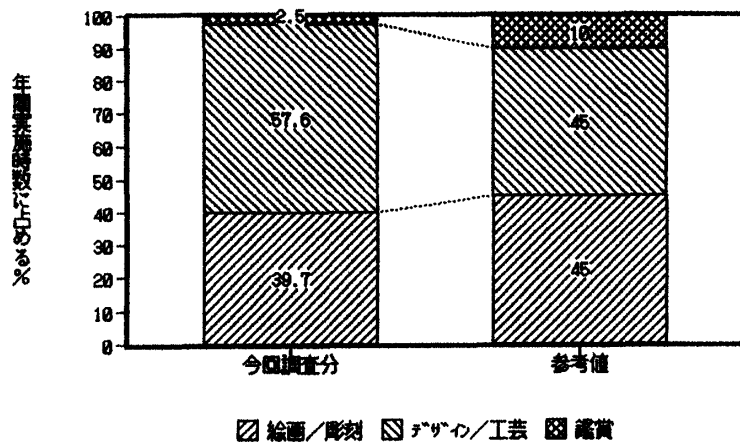


図1 第1・2学年における分野別時数構成比比較—今回調査資料平均値と参考値（昭和44年度版学習指導要領）
単位：年間実施時数に占める%

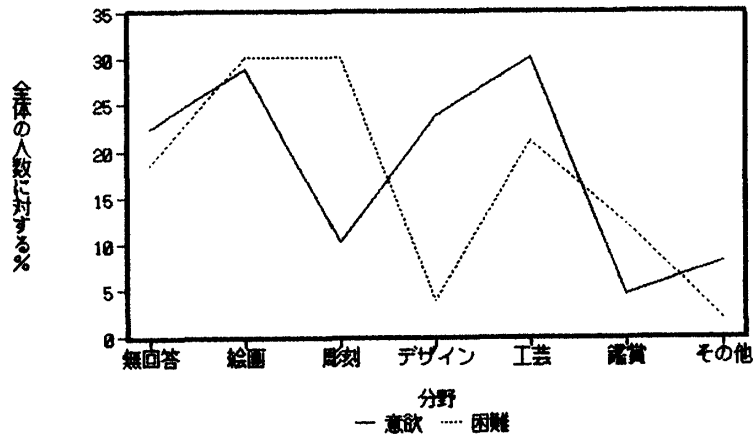


図2 分野別に見た教師の教材に対する意識
単位：回答者全体の人数に対する%

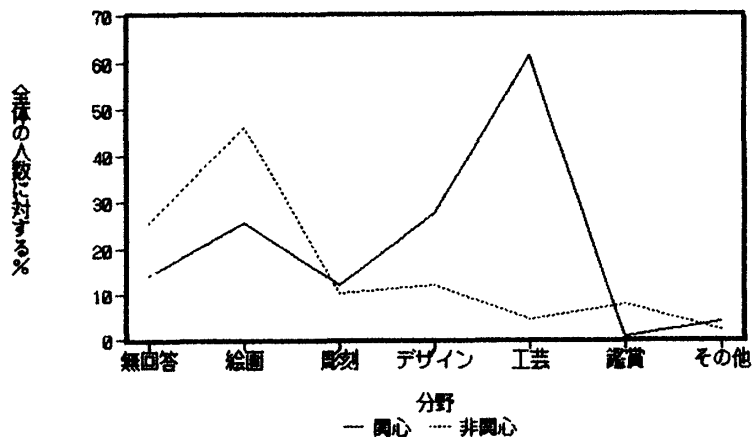


図3 分野別に見た生徒の教材に対する意識（教師からの報告による）
単位：回答者全体の人数に対する%

うべき現象が見られる。この調査では教師に実施した教材を答えてもらう際に、それぞれの分野を教師自身に分類して記入してもらった。その際に同じ教材と思われるものが教師によって異なる分類をされているものは集計上、適宜基準を設けて分類しなおしたが、特に〈絵画〉とこれらの分野の間にはこうした現象が顕著であり、表1に件数とともにまとめてみた。回答者全体での〈絵画〉教材の実施件数が314であることを考えると、この数は無視できないものがある。これは当然、西洋近代美術をモデルとするような自律的な作品としての側面と、あらゆる視覚的生産物に転化し得る画像（映像）としての側面をもともと「絵」という概念が持っていることから可能になるものだと考えられるが、ここにおいてこうした現象として現われる理由として、教師の単純な誤認とする以上に、現在次の2点が考えられる。一つは、実施したカリキュラムに対する反省を尋ねたところ、各分野を偏りなく実施したかったとして、〈絵画〉教材の不足を挙げる教師が最も多かったことから、生徒の関心の低さを前にして、ここでもまた、「美術の基本として〈絵画〉をもっと行なうべきだ」という教師の側の観念が、〈デザイン〉及び〈工芸〉的な活動の中における描画活動をも〈絵画〉と解釈を拡大していく心理的傾向を生んでいるのではないかという点である。もう一つはこれと反対の方向を持つものだが、西洋近代絵画をモデルとした絵画表現の在り方が相対化されつつあることが、最近聞かれるようになってきた、いわゆる「融合的」な教材解釈⁵⁾を促進する背景をもたらししているのではないか、という点である。

3 〈彫刻〉〈鑑賞〉教材の停滞

先述したように、これらの分野において、年間実施時数が0の場合が半数を越える高率であることについてさらに見ていきたい。図4は、〈彫刻〉〈鑑賞〉の教材を、ともに年間に一度も実施しなかった例（回答者の28.8%に上る）について、全体の平均と比べて逆にどの分野が増加しているかを表したものである。これに明らかなように、減少分のほとんどが〈デザイン〉〈工芸〉の教材の増加につながっている。このように、〈彫刻〉〈鑑賞〉に関しては、〈絵画〉の教材に見られたような教師からの強い理念的な支持や、他分野との内容的な融通といったようなことはほとんど見られず、実施に対する障害が、かなり直接的に実施時数の減少に反映されていると見てよいであろう（ただしこの調査は単年度のみを対象にしているので、3年間の構想の中で教師がどのように配分しようとしたかは明らかにできないことは留意しておく必要はある）。〈彫刻〉教材に対する教師・生徒の意識を見てみると（図2・図3）、「意欲」を表明している教師に対して「困難」を表明している教師が人数にして倍以上であり、この差は他分野との比較でも最も顕著なものである。一方、生徒の「関心」は、肯定と否定があまり高くない値でほぼ同率を示している。これは質問の仕方にもよるもので、教師の「意欲」「困難」については回答時現在のものを尋ねているが、生徒の「関心」については最近3年間に実施したもののうちで答えるように求めている。したがってもともと実施している教師が少なければ、生徒の「関心」に対する回答はいずれも低率になるはずである。この結果からのみ言えることは、少なくとも最近実施した教師の感覚では、〈絵画〉において見られたような明確な生徒の「関心」の低さは見られない、ということである。また、実施した教材ごとに教師に達成度を5段階で評価してもらった「効果」を見る限り、実施した教師の間では、〈絵画〉よりは高め、〈デザイン〉と並ぶ評価が記録されている（平

表1 <絵画>教材に関連した分類解釈上の問題点

具 体 例	件数
a デザイン的な教材を教師が「絵画」と認識，記入。 (例：ポスター，レコード・CDジャケット，イラスト，絵本，平面構成)	19
b 「絵画」を結果的に実用的なもの結びつける。 (例：カレンダーの絵，パズル，団扇，絵馬)	10
c 工芸・デザインの下絵を教師が「絵画」と認識，記入。	4
d 工芸上の描画活動を「絵画」と認識。 (例：陶器の絵つけ，ガラス絵)	12

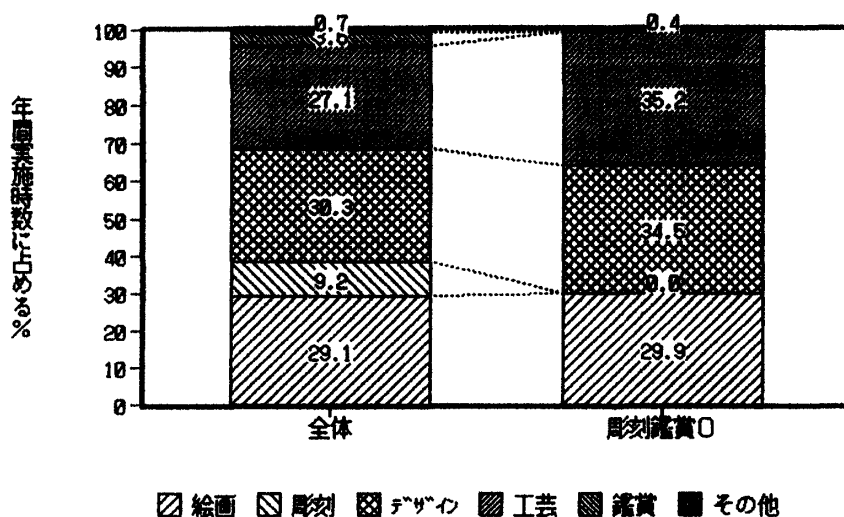


図4 分野別時数構成比比較一回答者全体と彫刻・鑑賞ともに時数0の集団
単位：年間実施時数に占める%

均で、〈絵画〉3.6、〈彫刻〉〈デザイン〉3.7、〈工芸〉3.8、〈鑑賞〉3.3)。それでは、図2に見られたような教師の側の「困難」の高さは、どのように考えたらよいだろうか。これについて教師が答えている理由で最も多いものは、「保管場所がない」「時間的余裕がない」などの設備・時間の不足といった要因である。また、「生徒が遊んでしまう」等の授業管理に関する理由も見られる。これらのことから、〈彫刻〉教材の実施を停滞させている主要な側面は、教材と学習者との関係における内面的な問題よりも、物理的要因や、授業の維持管理といった外的な関係との間に求めることができると考えられる。

〈鑑賞〉教材に関しては、実施時数、教師の「困難」度(図2)、実施した場合の生徒の「関心」(0%, 図3)、実施した「効果」(平均3.3, 前述)のどれをとっても、関心の低さや、指導法の欠如に対する教師の困惑を物語っているように思われる。学年別に見ると、第3学年では、他の学年に比べて2倍以上の実施時数を記録しているが、これにはこの地域の代表的な修学旅行先(京都・奈良)との関連学習、週1時間という授業時間、高等学校進学に評価が影響するため、「客観的な」評価基準としてペーパーテストに美術史に関する知識が使用されやすいこと、などが関連すると思われる。

4 教師主導の〈デザイン〉教材、生徒主導の〈工芸〉教材

これらの分野は、いずれも〈絵画〉とともに、平均して年間実施時数のほぼ3割ずつを占めているが、〈絵画〉と異なり、いずれも教師においては「意欲」が「困難」を(図2)、生徒においては「関心」が「関心を示さず」を上回り(図3)、そうした面からは実施において比較的葛藤が少ないと言える。

〈デザイン〉の教材について最も特徴的な点は、「意欲」と比較して「困難」を表明している教師が極めて少ないという点である。「意欲」の理由としては、「現代生活との関連」などの特性を挙げたもののほか、「生徒の動きを把握しやすい」「教える手立てがはっきりできそう」など、実施上の利点を挙げる場合が目立つ。また、教師の意識と時数構成比の増減との関連を調べたところ、〈デザイン〉の教材に関してのみ、「意欲」を表明した教師で時数が増加し(平均33.8%)、「困難」を表明した教師で時数が減少する(平均19.2%、回答者全体の平均では30.3%)という現象が見られた。これらの点から、生徒からの抵抗が比較的少ないことを背景に、指導が段階的に進行させやすいなどの授業過程の維持という側面から、教師の意欲が主導する形で〈デザイン〉教材への傾斜が進行している、と見ることができるだろう。

これに対して、〈工芸〉教材は、図1に見るように、教師の「意欲」も高い反面、「困難」を表明する割合もかなりある。しかしこの場合は、〈絵画〉教材において教師の「意欲」と「困難」が拮抗していたのとは性質が全く異なるという点が良い。〈工芸〉の場合は生徒が「関心」を示さなかった割合が極端に低く、逆に「関心」を示したとする割合は極めて高く、生徒からの圧倒的な支持を得ている様子が明らかである。そして、教師が「意欲」を表明した理由の最も多いものが「生徒の興味をひくものだから」という点であり、「困難」を表明した理由が「物理的困難」・「教師自身の専門外」・「技術的困難」などがほとんどを占めることなどから考えて、もともと教師の側からはこの分野に対する意識が高かったわけではないが、生徒の強い支持に促されて、専門外

の技術を（回答者の半数以上は大学で絵画を主に専攻しており、工芸が直接の専攻だった教師は3.2%に過ぎない）研修し、物理的・技術的困難はありながらも取り組んでいる、という姿が浮かんでくる。このように、〈工芸〉（そのかなりの部分は木による生活品の制作であるが）の場合は生徒からの教材に対する強い支持が主導する形で、「実施されたカリキュラム」におけるその重要度を増している、と考えることができる。

III 考察

ここまで述べてきた「実施されたカリキュラム」に現われた現象について、現時点では次の3点からの説明が可能であると考えられる。第1点は、変動する現代の中学校の教師と生徒集団との関係性の中で、授業過程の成立・維持にプラスに働く教材が選択される、という点である。その際に、〈デザイン〉〈工芸〉のように、段階的プロセスが個人の外部に計画として外在している教材は、その外在的プロセスを共有することによって教師と生徒集団との意志疎通に、場合によってはわずかではあるかもしれないが、一つの拠り所として機能する可能性を持つ。版画教材に対する評価の高さも、このようなことが一つの要因となっていると考えられる。さらに、〈デザイン〉〈工芸〉教材といっても、計画を一方的に貫徹するわけではなく、むしろ計画的・適応的プロセスを拠り所としながらその上に学習者個人の独自の発想や感覚を表現させようという自己表現的プロセスを組み込むことで授業体制の維持と自由な表現活動の両立をはかろうとするような努力が見られるのではないだろうか⁶⁾。II 2 で述べた〈絵画〉教材と〈デザイン〉教材との接近は、そのようなことを表しているように感じる。また、〈デザイン〉の例が安定した授業体制を生徒に提供する職務を持った教師の側の意向を表しているとするれば、〈工芸〉の例は、生徒集団の意識の動向も授業展開の主要な要因であることを裏付けるものである。

第2点は、青少年期の関心の問題である。彼らの関心が〈デザイン〉〈工芸〉的なものに向かう傾向があるということは他にいくつもの調査で報告されている⁷⁾。内面的自発性が表現の活動において重要なことはいうまでもないが、これだけの関心の低さをおしてなお描画による個性表現を主眼として普通教育において全ての生徒に経験させるということは、非常に高い（心理的）コストが払われているということが言える。

第3点は、教材がモデルとしている芸術活動の持つ構造にかかわる点である。纯粹美術・近代デザイン・伝統工芸と分割された西洋近代美術モデルが、学校における教育活動において（そしておそらくは今後の社会において）どれほど有効性を持ち得るか、という点が試されているように感じられる。

この3点は、相互に関連を持って授業過程に影響する。教材のモデルとなる芸術の活動の持つ性質と機能が、学習者の積極的な表現活動を誘発するような関心を獲得することができるかどうか、また、授業過程の維持進行に寄与し得るかどうか、という点が理念的問題を差し置いて当面する実施上の問題として迫られることになる。教材（芸術）そのものの機能による授業の進行に大きな期待が持てない場合、専ら日常的に培われた教師・生徒間の人間的な関係を主軸とした努力、さらには外面的な管理強化により授業体制の維持をはかるほかないが、基本的に教師の組織

は、現在の社会状況を反映した生徒集団の意識が持つ量的潜在力に対して脆弱であり⁸⁾、こうした教師の個人的努力によってのみ美術教育の活動を維持していくことは非常な困難を伴っている。こうしてみると、芸術という媒体を通して、なんとか生徒たちとのコミュニケーションをつなぎながら授業の進行を維持し、彼らの表現活動の機会を生み出そうと、日々試みる教師の姿が浮かび上がってくる。そこで、教師の信頼を集める教材（芸術）は、どのような構造を持つかという点が問題となり得るのである。

V 結び

この研究は、研究者自身の教育実践力の向上を直接の目的としていないという点において、いわゆる「実践研究」ではない。外部から、学校における美術教育の活動で起きた現象を対象化し説明を試みるという点において、学校で実践しておられる方々との立場の違いは宿命である。そのような立場からあえて現在の学校における問題を扱うにあたって、今のところ次の2点を心がけるべきだと考えている。その一つは、カリキュラムの実施は、その現場の状況に巻き込まれて、その決定による成功も失敗も、生徒とともにその場で味わわなければならない責任を負った個々の教師に帰されるべきであり、その波を被らないところにいる人間が、外部から調査して理念的基準によってそれらの実践内容を「批評」することに関しては極めて慎重になるべきである、ということである。従ってここでの考察の基本的態度は、実践内容の価値を判断するのではなく、それぞれの教師が選択した内容が、「その状況ではその選択しかあり得なかった不可避のものである」として全面的に肯定した上で、そこにあらわれた関係性を探る、というものである。二つ目は、単なる数字の操作や概念的な「批判」に終始せぬよう、中学校に勤務した経験をもとに、資料の背後にある、実際の学校で起きる現象に対する具体的な想像力を失わないように心がける、というものである。こうした観点は、完成された到達点としてのカリキュラムと実態との距離を測るのではなく、各教師の自覚のもとに、学校で日々投げ掛けられている試みの総体として、「実施されたカリキュラム」の動向をとらえていこうという視点から出発しているし、また、現実の美術教育の実体を担っている、学校での日常的な実施内容が、不問に付されている、という感覚を抱いたことにもよるものである。

この研究の次の段階では、これらの「実施されたカリキュラム」と、制度・教科書・指導資料等に設定されたものとの間の関連を調査し、また、様々に異なる学校の状況を抱える教師の意識・態度との関連についても考察を加えるなど、より深い検討を進めていく必要があると考える。また将来的にはこれらのカリキュラムの実施に内包される、芸術との構造的関連について迫ることを目標としている。

また、調査活動を通しての教師との協力という、この研究の持つもう一つの側面については、調査を依頼した全ての教師に対して、報告書を2回送付し、その後も情報提供の活動を試みている。個人的なレベルでもあり、全くわずかな試みでしかないが、でき得るならば、情報を介しての学校との双方向の協力体制を模索できないか、という期待を持って調査活動を進めてきた。厳しい勤務状態のなか、教科研修のための教師間の連携もますます取りにくくなっている現在、一

定地域の全ての公立中学校の美術科教諭のうち、約半数もの方々の協力が得られたということが、そこへ至るまでにいかに様々な方々のご苦労やお力添えがあったかということを表している。この点は、いわゆる「現場」をご存じの方、あるいはその状況を想像することのできる方なら、おわかりいただけると思う。末筆ではあるが、調査に回答していただいた中学校の先生方、ならびにご指導・ご協力をいただいた全ての方々に、厚く御礼申し上げたい。

【註】

1) 1991年3月～6月、郵送等による質問紙法により、平成2(1990)年度に所属する一つの学年において実際に行なった教材及び関連事項について、東京都内8市・区公立中学校美術科教諭全数に調査、うち156名回答(53.1%)

2) ここで使用する「分野」とは、かつての5領域(絵画・彫刻・デザイン・工芸・鑑賞)の概念にほぼ対応するものである。もちろん、学習指導要領ではすでに2領域のもとに緩やかにまとめられ、また、近年の実践報告や研究発表でも脱領域的・融合的な視点に立ったものが見受けられる。しかし、教科書(1990年度使用のもの)の教材例等を見てもほぼ5つの分野に沿って配列されている場合が多く、実践現場の大勢としては、それほど急激に移行するものではないと考えれば、現時点で実際に採用された教材を把握しようとするこの研究の目的からすれば、一応の有効性を持った分類であると見ることができる。また、これらの分類は、平面・立体というような形状の相違ではなく、その教材がモデルとする活動の性質の相違に基づくものであるという点に注目すれば、現代社会における芸術の持つ諸性質との関連を問題とすることができる。

3) このような調査活動の例としては、例えば、以下のようなものがある。

◎東京都高等学校美術工芸研究会研究部編、「1987年度 都立高校のカリキュラムから」、『東京都高等学校美術工芸研究会紀要』, 1988

◎神奈川県公立中学校教育研究会美術部会研究部編、『昭和63年度美術部会研究部研究報告神奈川県下の美術教育の実態と現代社会とのかかわりあいとをさぐる』, 1988

いずれも、公立高校・中学の先生方が、地域の研究会の活動としてまとめられた貴重な資料であり、その成果に学ぶべき点は多い。これらの調査と本研究の主な違いは、

①前記の調査がいずれも教材の「件数」で集計しているのに対して、本研究では「件数」と「時数」の両面からカリキュラムの性質を把握しようとしている。「時数」を導入することによって調査方法は複雑化するが、教師と生徒が実際に体験する時間の割合を表現できるほか、通常「時数」で計画される「指導計画」等との比較が可能になる。

②本研究では教材の種類のみでなく、教師・生徒の各教材に対する意識や態度、評価などの側面も調査し、カリキュラムの実施とその他の要因との関連を追究できるように試みている。

4) 回答により一定でない部分があった教材の分野の区分について、さらに整理して計算し直したため、図1・図4について、第14回美術科教育学会において報告した同種の図と数値が若干異なっている箇所もある。

5) こうした観点からの研究としては、例えば以下のものがある。

◎辻 泰秀、「美術科における「総合的」「脱領域的」な考え方にもとづいた教材設定の方法」, 第14回美術科教育学会, 1992

また、指導のための刊行物にも、題材例が見られる。例えば、

◎文部省、『中学校美術指導資料 指導計画の作成と学習指導の工夫』, 1991, に見らる「ネットワーク題材」など

また、〈絵画〉の側から、表装や額装という、生活の中での〈絵画〉の存在理由を意識づけるようなものを含んだ教材開発も行なわれている。これらも同様の背景を持って登場してきたものと考えることができる。例えば、

◎杉本昌裕、『高等学校絵画学習での意欲的に取り組める教材の開発』, 東京都立教育研究所 美術研究室, 1991

6) 松原郁二、『人間性の表現と教育』, 東洋館出版社, pp. 203—206, 1972, には、R型創造(「生活造形」)の持つ計画的な過程に、A型創造(「心象の自由表現」)の持つ、素材との試行錯誤的なフィードバックの繰り返しの過程を組み込んだモデルが示されている。

7) ◎「美術を選択している生徒の中では、好む分野に特徴的な傾向が見られる。それは、絵画学習が好きな生徒は23.1%と多い反面、嫌いな生徒も30.4%と多いことである。これに比較すると、工芸やデザインは好きな生徒が多く、嫌いな生徒は少ない。」(杉本, 前掲書, p. 5)

◎「7割ほどの生徒が「絵を描くよりは物をつくるほうが好き」といった状況なので平均した教材選択がむずかしい。」(渡部 亮,「ペーパークラフト」,『第36回福島県高等学校教育研究会美術工芸部全県大会 研究集録』, p. 11, 1991)

◎「美術のどんな分野が好きなかと尋ねると多数の生徒が漠然とではあるが、女子では工芸、またはイラスト的なもの、男子では物を形作る彫刻的なものが好きであると答える。では事物を観察して平面にそれを表現する、いわゆる絵画が好きな者、と尋ねるとこれは意外と少ない。このことをさらに詳しく調べてみると、本校生の多くが興味をもっているものは、3次元空間を自らの創造力をもって2次元空間に表現するというよりも、既成の事物(創作されたもの)を模倣することへの満足感や、刃物などによって得られる物質に対する触覚的な快感など、いわゆる美術の表層的な属性に興味があり、またこれらの感覚が得られる教材に関心があることがわかった。」(磯上芳久,「シルクスクリーンによるカレンダーの制作をとおして」,平成4年度福島県高等学校教育研究会美術工芸部全県大会 研究発表資料,未刊行資料,1992)

8) 小浜逸郎、『学校の現象学のために』, 大和書房, pp. 138—141, 1985